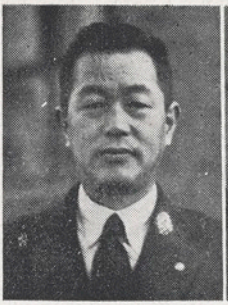
第三章　支社局概況

支社及び支局

長社支濱爾哈越船


長社支天奉內竹

長社支連大藤近

長社支坂大坂清

長社支爾哈々齊下坂

長社支疆蒙井安

長社支江丹牡村中

長局支寧東島豐

長局支吉延原中

長局支安北山高

長局支奥孫畑北

長局支安東原上

長局支林吉田飯

長局支德承上川

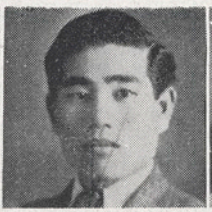
長局支州錦利今

長局支東安野高

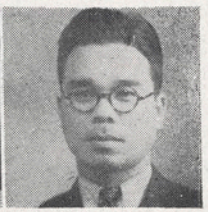
長局支斯木佳本橋

長局支同大川鮎

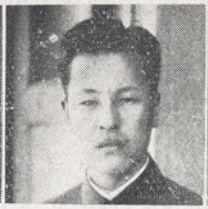
長局支和厚木茂


長局支潮新王川吉

長局支爾拉海部坂越


長局支化通山平

柴田鞍山支局長

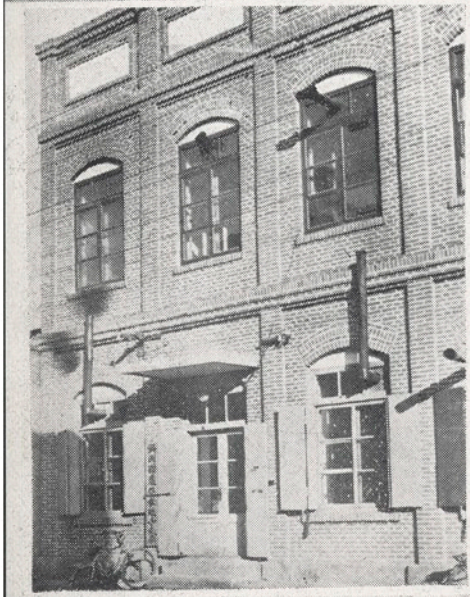


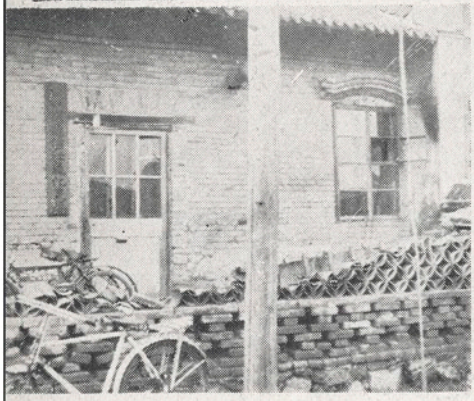
新美黑河支局長

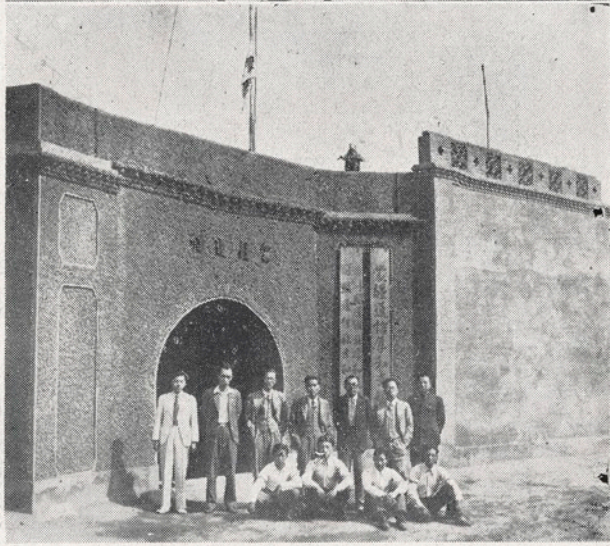
内山四平支局長

哈爾濱支社

吉林支局（右上）
安東支局（右下）

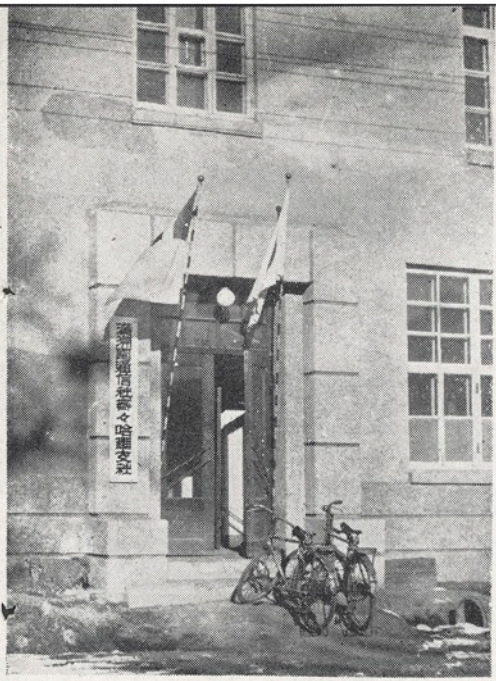






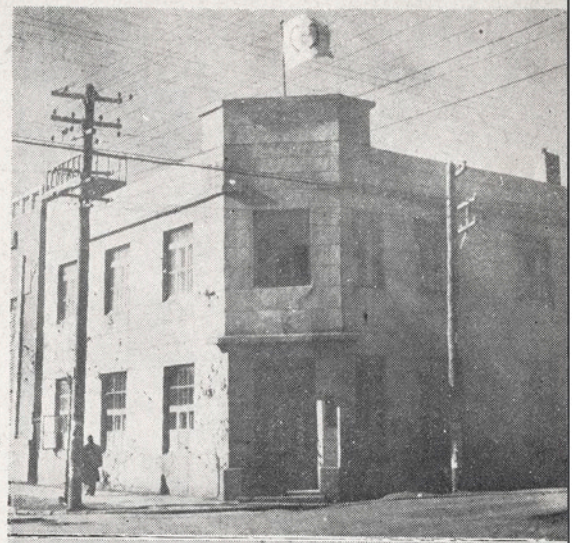
(下)局支化通　(中)局支吉延　(上)局支州錦

(下)社支疆蒙　(中)社支天奉　(上)社支連大



齊々哈爾支社

海拉爾支局



(上)社支江丹牡
(下)局支斯木佳

孫吳支局

一、概　觀

創立當時の國內支社局は大連、奉天、哈爾濱三支社に齊々哈爾支局を加へて僅かに四支社局を數へるに過ぎず從事員の如きも社員、雇員を合して四十九名のさゝやかなる陣容であつたが、康德九年十月現在に於ては支社所在地は大連、奉天、哈爾濱、牡丹江、蒙疆、東京、大阪、齊々哈爾の八ヶ所、支局所在地は東安、孫吳、北安、延吉、東寧、佳木斯、安東、錦州承德、吉林、通化、海拉爾、王爺廟、厚和、大同、包頭、四平、黑河、鞍山の十九ヶ所に上り又琿春、滿洲里、札蘭屯、羅津、鷄寧に特派員を常置すると共に其の他國內に通信員を委囑し又盤谷、南京に特派員を派遣し滿洲國唯一の國策通信社として鐵壁の通信網を確立、僅か十年にして全く飛躍的擴充發展を遂げるに至つた。次項以下に各支社局の發展狀況を摘記するが左に支社局長特派員、通信員一覽表を掲げ、併せて支社局開設の沿革を知るの資としたい。

滿洲國通信社支社局長、特派員、通信員一覽表

（年月日は就任時を示す）

大連支社長　寒河江堅吾（大同元年十二月）升井芳平（康德四年二月）長澤千代治（康德六月一月）竹內悅郎（康德六年十月）宮崎司（康德七年十一月）近藤勇藏（康德九年十月）

奉天支社長　大西秀治（大同元年十二月）帆足升（康德四年七月）鈴木俊久（康德六年十月）竹內悅郎（康德九年十月）

哈爾濱支社長　三田雅各（大同元年十二月）本橋壽一（康德元年四月）三藤順記（康德六年四月）相原敏治（康德六年十二月）帆足升（康德九年三月）船越武十（康德九年十月）

牡丹江支社長　【支局長】櫻川義男（康德四年六月）【支社長】中村秀男（康德九年三月）

蒙疆支社長
東京支社長
大阪支社長
齊々哈爾支社長
東安支局長
孫吳支局長
北安支局長
延吉支局長
東寧支局長
佳木斯支局長
安東支局長
錦州支局長
承德支局長
吉林支局長
通化支局長
海拉爾支局長
王爺廟支局長

【支局長】澁谷春夫（康德四年十二月）【支社長】松本於蒐男（康德五年三月）三藤順記（康德六年四月）安井徹（康德九年三月）
【支局長】芹澤眞一（大同元年十二月）【支社長】宮脇襄二（康德三年九月）田中寛次（康德四年六月）
金井勝三郎（康德元年十一月）宮脇襄二（康德四年八月）森久（康德六年九月）田中寛次（康德七年九月）清水信一（康德八年十一月）
【支局長】岩崎小廉（大同元年十二月）三藤順記（大同二年十一月）飯田台輔（康德二年五月）加藤勘次（康德五年一月）寺井慶乘（康德六年十月）【支社長】坂下健一（康德九年十月）
【代理】中原修（康德七年八月）【支局長】中原修（康德八年九月）風間正太郎（康德九年二月）上原虎雄（康德九年十月）
飯田台輔（兼務、康德四年十月）加藤勘次（兼務、康德五年一月）横山武次郎（康德六年八月）北畑勳（康德九年十月）
高山信雄（康德六年八月）
中村秀男（康德元年五月）今利幸男（康德六年九月）柴田鐵二（康德七年十一月）中原修（康德九年十月）
中村敏（康德六年十一月）越坂部義明（康德七年五月）佐々木正晴（康德九年三月）豐島正雄（康德九年十月）
水島芳太郎（康德四年十二月）飯田台輔（康德五年一月）安井徹（康德六年六月）橋川馨（康德七年五月）橋本不二男（康德九年二月）
織田五郎（大同二年二月）高橋榮一（康德二年五月）今村勝比古（康德四年七月）高野恒男（康德九年三月）
加藤勘次（康德三年十月）大谷正義（康德四年十一月）木島重治（康德五年六月）苅田茂（康德七年六月）今利幸男（康德九年六月）
大橋善次郎（大同三年二月）柴田鐵二（康德四年七月）上虎原雄（康德六年十年）溝手俊（康德七年十一月）川上鎭男（康德九年七月）
梅原喜滿次（大同二年）諏訪本正男（康德元年）溝口五郎（康德五年十一月）豐島正雄（康德九年三月）飯田台輔（康德九年十月）
戸井田耕（康德五年十月）平山貞之（康德六年九月）
中村秀男（大同二年五月）倉林秀夫（康德元年五月）茂木學惠（康德三年五月）杉原雙六（康德四年四月）阿部勝昆（康德六年一月）越坂部義明（康德九年十月）
吉川正明（康德六年七月）

山海關支局長　鮎川不可止（康德元年五月—康德二年六月支局閉鎖）
厚和支局長　松田悟（康德四年十二月）西村清俊（康德六年四月）長山一（康德七年一月）茂木學惠（康德九年十月）
大同支局長　小澤昌次（康德五年五月）澁谷春夫（康德五年九月）鮎川不可止（康德六年四月）
包頭支局長　佐藤武善（康德五年九月）鈴木五男（康德九年十月）
四平支局長　川上鎭男（康德八年七月）內山眞一（康德九年六月）
黑河支局長　【特派員】安永治（康德六年八月）【支局長】新美嶽雄（康德九年十月）
琿春特派員　菊川新太郎（康德五年八月）
滿洲里特派員　戶井田耕（康德六年十月）鈴木力（康德九年十月）
鷄寧特派員　柴山正雄（康德九年十月）
札蘭屯特派員　松川準吉（康德六年十月）靑木秀夫（康德九年三月）諸谷司馬夫（康德九年十月）
羅津特派員　淵野菊市（康德六年九月）小川宏（康德九年三月）
盤谷特派員　岩城正治（康德九年十月）
南京特派員　吉田秀博（康德九年十月）

通信員

△同江通信員＝鹽澤正篤（康德八年二月）谷口正男（康德八年十二月）△圖們通信員＝宇都木四郎（康德五年十二月）△鞍山通信員＝野尻彌一（康德七年七月）△營口通信員＝飯野元一郎（康德六年十一月）關守銳（康德七年十一月）△開原通信員＝坂宮成（康德六年十一月）△本溪湖通信員＝石田連治（康德七年九月）△王爺廟通信員＝池田昌春（康德六年五月）△撫順通信員＝柴田寬輔（康德六年九月）△阜新通信員＝宮口富（康德七年九月）△遼陽通信員＝渡邊德重（康德八年七月）△永安屯通信員＝黑須福雄（康德七年七月）△龍爪通信員＝船越繁一（康德七年七月）△北學田通信員＝中井庸（康德七年七月）△千振通信員＝太田宗次郎（康德七年七月）△靑葉通信員＝森邦衞（康德七年七月）△鶴立崗通信員＝淸水傳十郎（康德七年十月）△富錦通信員＝神林石造（康德七年十月）小泉映（康德八年十一月）

二、支社の發展概況

△**大連支社**　大連支社は電通、聯合兩社の大連支局の業務を繼承して大同元年十二月一日、敷島町四十九番地大連株式商品取引所内に孤々の聲を擧げた。初代支社長には當時滿日旅順支社長であつた寒河江堅吾氏が入社就任し、編輯關係責任者が片山誠之、經濟關係責任者が高橋勇、無電關係責任者が芳賀勇で當時は社員、雇員合して僅か十五名の從事員で一般ニュース通信一日五便、經濟通信一日二便を發行し、滿洲日々新聞、大連新聞（以上日文）滿洲報、關東報、泰東日報（以上滿文）にニュースの供給を開始した。大連が日本の滿洲進出の據點であるばかりでなく滿洲國が建國早々で今日の如く發展を遂けざる當時に於ては滿洲の表玄關として、將又全滿鐵道を掌る滿鐵本社の所在地として大連が凡有る面より見て重要性を有してゐたと同樣に大連支社が重要視された事も當然であつた。又第二次上海事變や支那事變發生するや大連は現地と國通本社及び東京同盟本社間の無電連絡基地としての重大使命を受持ち支社員一致、手不足を克服して完全に此の責務を果し得た事は特筆に價しよう。斯る情勢より支社の從事員も漸次增加の一途を辿り敷島町の支社屋では狹溢を感ずるに至り、一方滿日よりも國通、滿日間の連絡を緊密化するため滿日三階に移轉方を希望して來たので康德四年一月十七日現在の東公園町滿日三階に事務所を移轉した。康德四年七月一日には日本商業通信社大連支局の業務を接收し同日より「商業通信」の發行を開始し、更に康德五年八月一日には寫眞部を設置して「寫眞通信」をも發行し、又廣告業務取扱の爲め營業部を新設する等支社業務は逐次擴張され、更に康德六年二月十一日新京、大連間の直通專用電話線の開通を見るに至つて益々繁忙を極めてゐる。現在では「滿洲國通信」「商業通信」「經濟通信」「寫眞通信」の四通信を發行し、從事員總數は社員、雇員を合して六十八名で支

社幹部社員は支社長近藤勇藏、總務部長(兼)近藤勇藏、編輯部長松平九洲男、通信部長馬場書生である。

△**奉天支社**　奉天支社は本社と同樣大同元年十二月一日、日本電報通信社滿洲支社、新聞聯合社奉天支局、遼寧通信社三社の通信發行業務を接收して木曾町六番地舊電通支社跡を事務所として創設された。開設當時の支社長は大西秀治で社員十二名の陣容を以て毎日日文四便、滿文二便を發行して左記各社へニュースの供給を開始した。

【奉天】奉天日々新聞社、奉天毎日新聞社、奉天新聞社(以上日文)、盛京時報社、大亞公報社、民報社、奉天日報社、奉天公報社、紅卍字新聞社(以上滿文)、【撫順】撫順新聞社(日文)、【遼陽】遼鞍毎日新聞社(日文)、【鞍山】鞍山日々新聞社(日文)、【安東】國境毎日新聞社(日文)【鐵嶺】鐵嶺新聞社(日文)

支社創設間もなく三角地帶(東邊道)の匪賊討伐、山海關事件、引續いて熱河討伐戰等の大事件が續出し其の都度本社よりの應援に依つて報道の萬全を期したが、特に熱河討伐戰に際しては報道本部を奉天支社内に設け新京本社より大矢編輯局長、佐々木通信部長、升井聯絡部長、野中英文部長の外島田不朽郎、濱田秀雄、益田謙吉、坂井新次郎、川島孝太郎、勝木正雄の六社員も大擧來奉して擧社一致結束、不眠不休の活動を續けて創立後日尚ほ淺い國通に執り試金石とも云ふべき此の事件を大成功裡に完遂して遺憾なく其の眞價を發揮する事を得た。斯る大事件の續發と商工業都市としての奉天の重要性に鑑み漸次支社陣容も整備され之に伴つて社屋も狹溢を感ずるに至つたので、大同二年二月二十四日浪速通四十五番地に社屋を移轉する至つた。其の後滿洲國皇帝陛下の御訪日、御答禮使秩父御名代宮殿下の御來滿等に際し奉天支社が國策通信社としての使命と内地との連絡基地として擔はされた重要任務を完全に果したことは此處に記するまでもない。康德四年四月一日奉天に於てローカルニュースを主要記事として一日二便發行してゐた奉天電報通信社を統制の目的を以て支社に接收すると共に、更に同年七月一日日本商業通信社の滿洲に於ける業務一切を國通が接收するに及び奉天支社でも同社奉天支局を接收し

て同日附を以て商通部を新設し「商業通信」の發行を開始した。當時の商通部の陣容は主任平手義一、社員池田寅十四、下野道廣、渡邊秀逸、青木俊雄の五名であつた。

同年七月蘆溝橋に於て日支事變勃發するや奉天支社は東京並に新京本社へのニュース寫眞の中繼地として著しく繁忙を極めるに至つたので新たに寫眞部を設け本社寫眞部より木村正樹社員が著任し、又國通が國策通信社としての要請に依つて架設し滿洲通信界に一エポックを劃した新京、大連間直通專用電話も完成するに至り、寫眞電送の送受信をも合せて開始するに及んで奉天支社は內地との連絡中繼地としての重要性を增加し、之等の設備と之に伴ふ社員の激增に依り又復社屋の狹溢を告げ、康德七年一月十五日現在の協和街五段二十三號に支社屋を新築して、移轉をなし支社中隨一の大陣容を擁して其の使命に邁進してゐる。支社現在の幹部社員は支社長竹內悅郎、總務部長高橋謹爾、編輯部長櫻川義男、通信部長木島順二である。

△**哈爾濱支社**　哈爾濱支社は國通創業と共に大同元年十二月一日、電通、聯合の哈爾濱に於ける業務を繼承し初代支社長三田雅各が支社員十八名を率ゐ日文、滿文、露文通信を發行したが其の後寫眞、漫畫、入札の各通信を發行する等事業の發展に伴ひ社屋が狹溢になつたので、斜紋五堂街に移轉したが更に不便を感ずるに至つたので康德四年新築計劃を樹て總工費十萬圓を以つて地段街一號の哈爾濱目貫の場所に壯大なる現社屋を新築し康德五年十一月竣工と共に之に移轉した。同支社は北滿の要地にあるだけに馬占山事件、蘇炳文事件、東支鐵道買收問題、國境劃定に關するハルビン交涉等の重要問題を初め各種の事件、問題に際して常に全支社を擧げて活躍し、又北滿の開發、文化の向上に力を盡し、國政、省政の宣傳浸透に努力し、常に省內に記者を派遣して、地方行政機關の活動を援助しつゝあり、現に日滿文各四便、露文便を發行してゐる。現支社の幹部は支社長兼總務部長船越武十、編輯部長風間正太郎、通信部長三谷貞雄である。

△**牡丹江支社**　牡丹江支社は康德四年六月一日牡丹江市昌德街六ノ三に支局として開設され、初代支局長櫻川義男ほか一名の社員で一日二便の通信發行業務を開始した。開設當時は發行部數も僅か二十部に過ぎなかつたが牡丹江が開拓地を背後に持ち東滿の中心都市として、漸次發展するに及んで支局の陣容も擴充され康德九年二月には社員も支局長の外五名に增員し、發行回數も四便になり每日多量の信報を各界に提供してゐる。支局陣容の擴大强化に伴つて事務所も狹溢を感ずるに至つたので康德五年春昌德街三ノ一に支社を移轉し更に康德六年十一月昌德街一ノ一に總工費四萬五千圓を以て二階建社屋を新築し移轉を完了したが、牡丹江が東滿の中心地として軍事的にも政治的にも益々重要性を加へて來たので康德九年三月支社に昇格し初代支社長に中村秀男が就任し今日に至つてゐる。尙ほ牡丹江支局開設と同時に東部滿ソ國境及び三江省を管轄區域として佳木斯通信部を設置し、其の後康德四年十二月佳木斯支局開設に協力し、更に東安省の新設と共に東安支局をも兼務し、更に綏芬河、東寧支局の開設に當り牡丹江支局が母體となり開設事務に當つた事を特に記して置く。支社次長は山形吾一である。

△**齊々哈爾支社**　齊々哈爾は北滿の重要都市として電通は早くより玆に支局を設置してゐたが大同元年十二月一日國通の創業に伴ひ、岩崎電通支局長が引續き國通初代支局長に就任、馬占山事件、蘇炳文事件を初め北滿に於いて頻發する各種の事件、重要問題に際しては常に信報報道の第一陣を承つたもので每日三便を發行して各方面に信報を配給してゐる。社屋は初め齊々哈爾豐恒胡同一號に設置したが近年に至り永安街一四八に移した。また松方新理事長就任以來の通信網擴充强化に基く現地充實のため本年十月一日、齊々哈爾支社として昇格し同日付を以て哈爾濱支社次長たりし坂下健一が支社長となり、目下支社陣容を整備中にして次長は長山一ある。

△**蒙疆支社**　については本章第四項に述ぶ。

△**東京支社**　滿洲國通信社は新京に於て孤々の聲を擧げたが社の創立に關しては第一に電通と聯合の協力を必要とし、又財政的には日本外務省の補助を得ねばならず東京支社の重要性は本社と同等の地位にあつた。其の際初代支社長に就任した芹澤眞一は多年東京新聞社に在つて各方面より其の手腕を認められ外務省の推薦もあつただけによく內外の事情に精通し社の發展に盡粹し東都に於て我が國通の名聲を高揚したものである。大同元年十二月創業當初は東京市京橋區銀座西四ノ三數寄屋橋ビルに支社を設置したが、其の後營業關係の新發展に伴ひ康德二年十月大阪支社にあつた武藤彪を東京に轉勤せしめ、廣告取扱ひの業務を開始したが日進月歩の發展振りを示し社屋も東京市京橋區銀座西七ノ一電通ビルに移轉した。康德三年九月滿洲弘報協會の設立に伴ひ、宮脇襄二理事が第二代支社長に就任したが翌四年六月國通が協會より分離獨立するに及び田中寛次氏が弘報協會日本總社長の傍ら國通支社長を兼務し康德八年十一月に及んだ。現社屋は東京市京橋區銀座七ノ四にある。

△**大阪支社**　大阪支社は營業を目的として康德元年七月に武藤彪を本社より派遣して開設し、當時大阪に於て日華社を經營する金井勝三郎氏との間に大阪の廣告を滿洲に送り込む事に就て協議し其の結果日華社の滿洲關係業務を引受ける事とし同年十一月金井氏を初代支社長に迎へ大阪市北區堂島濱通一ノ四四に支社を設け鋭意事業の擴充を計つた。康德四年八月、弘報協會の設立に伴ひ金井勝三郎辭職したので東京支社長に就任した宮脇襄二理事が大阪支社長を兼務し、支社も大阪市北區堂島濱通り一丁目一ノ一に移した。

康德六年九月に至り、第三代支社長として森久が就任大いに再擴張を計つたが、翌七年九月に至り辭任するに至つたので東京支社長田中寛次が兼務する事となり、康德八年十一月同氏の退社に伴ひ現支社長淸水信一が第五代支社長に就任し今日に至つてゐる。同支社は純然たる營業支社とも稱すべきものである。

三、支局・特派員・通信員

一 各支局の發展概況

△**東安支局**　東安支局は東安省の新設並に東滿の進展に即應して康德七年八月新設、中原修が支局長代理として赴任し翌年九月支局長に昇任し、康德九年二月風間正太郎が第二代支局長、康德九年十月上原虎雄が第三代支局長に就任今日に及んで居る。社屋は東安街順和街一八番地にあり毎日二便を發行してある。

△**孫吳支局**　孫吳が北邊鎭護の第一線要地として發展するに及び康德四年十月孫吳明和街に開設された。初代支局長は當時の齊々哈爾支局長飯田台輔が兼務し、通信、發行業務は山田義數外二名が當り一日二便を發行してゐた。康德六年に北孫吳三笠町陸軍官舍内に移轉したが社屋狹隘のため目下永代路一四二番地に總工費十萬圓を投じて社屋を新築中で完成次第移轉の筈である。從事員は北畠支局長以下四名で一日二便を發行してゐる。

△**北安支局**　北安省の新設に伴ひ康德六年八月二十六日北安街東松區軍人會館に開設、同年十二月一日天城區九號に移轉更に八年六月下旬北安省公署前に工費約三萬圓を投じて社屋兼社宅を新築移轉して今日に至る。當支局は通信發行を行はず專らニュースの取材支局として活動してゐる。支局長には開設當時より高山信雄が就任現在に至つてゐる。

△**延吉支局**　延吉支局の前身たる龍井支局は康德元年五月二十二日吉林省(現在間島省)龍井村に開設され、支局長中村秀男外二名で一日二便三十部を發行してゐた。康德四年六月一日間島省が新設されたので省公署の所在地たる延吉街康平區安

定路に移轉して延吉支局と改稱した。現在は一日二便を發行してゐる。當支局が張鼓峯事件に際し連絡基地として活躍せる事は特筆に價しよう。現支局長は中原修である。

△**東寧支局**　滿ソ關係の緊迫に伴ひ我社としても國境方面の通信網充實の必要に迫られ東寧支局を康德六年十一月十六日東寧縣昭德區康德大街七番地に開設し、初代支局長には中村敏が就任して當時通信の發行を行はず專ら取材方面に重點を置き活動をなした。康德七年五月十五日二代支局長に越坂部義明が着任し更に九年三月一日三代支局長佐々木正晴と交代、同年八月一日より社員一名を增員し一日二便の通信發行を開始した。現支局長は豐島正雄である。

△**佳木斯支局**　佳木斯支局は康德四年十二月新設せるもので、從來同地に通信員として駐在せる水島芳太郎が支局を佳木斯中央大街に設置し支局長に就任した。同地には三江報あり、次で三江日日新聞社の新設されるあり東北滿の要地として同支局は每日三便を發行する外各種の業務は益々發展の一途を辿り社屋も狹くなつたので安民街に移轉し今日に至つてゐる。

△**安東支局**　安東支局は大同二年二月十五日安東市六番通七ノ一に開設され支局長は織田五郎で日系二名、鮮系二名の從事員にて一日三便十五部を發行してゐた。事務所は同年九月官電街に移轉し更に康德二年九月大和町橋通九ノ二に移轉康德六年十二月大和橋通七ノ三の現支局所在地に移轉して今日に至つてゐる。現在は通信發行業務の外康德四年六月日本商業通信社安東支局の業務を接收して商通部を新設して國境都市安東經濟界に貢獻してゐる。當支局は開設以來康德四年春の反滿抗日團體保國會の檢擧事件、同年の燒死者八百名を出した滿洲舞台の大火等、幾多重大事件を取扱ひ國通の聲價を上げ又康德三年十月より開設された安奉地區討伐戰並に北部東邊道討伐戰には當時の支局長高橋榮一が自ら從軍し活躍をなした。現在一日三便の外經濟通信を發行してゐる。現支局は高野恒男である。

△**錦州支局**　錦州支局は康德三年十月一日大馬路二丁目に開設され、支局長加藤勘次以下三名の社員を以て一日二便の通

信發行業務を開始した。當時の發行部數は約二十部、康德四年十月正陽區吉野街四番地に事務所を新築移轉し逐年通信網を擴大し今日に於ては三便を發行し、各方面に配布してゐる。現支局長は今利幸男である。

△**承德支局**　承德支局は康德元年三月一日を期して開設された。當時熱河省には鐵道も電燈もなく大橋、今安、西田の支局員三名は朝陽から電池式受信機印刷用具一切を自動車に積込み、寒風荒ぶ禿山を飛ばして二月二十六日承德に乘り込み、宿屋の二階でニュースを受信し關係機關より假發行の許可を得て三月一日の建國節を期し通信を發行したのが最初である。當時地元唯一の熱河新報社は國通の進出提携により、生々しいニュースで紙面を飾り體裁を整へるに至つた。同紙は日字紙を持たなかつたので、國通では發行通信を美濃判の大型としてこれを上下二段に分け細字で書き込み、通信を以つてこれを代行したがラジオもない土地柄丈けに、各機關始め一般居留民から歡迎された事も又想像以上であつた。その後協和會省本部一偶を借受けてこゝに支局を移し益々業務を擴張しつゝ北支事變勃發の年、康德四年(昭和十二年)を迎へた。北支事變勃發と同時に大橋支局長は直ちに從軍の社命を受けたので代つて柴田鐵二が支局長となり同時に西大街に一屋を借り受けて事務を續けた。一方柴田支局長は熱河新報主幹となりこれが經營の衝に當つた。この國通支局の並々ならぬ努力は當時の在承官民に多大の感銘を與へると同時に國通の名を弘めるに大いに役立つたのである。この熱河新報經營は弘報協會成立と同時に同社の基礎固めを置土産として緣を切り通信社對新聞社の關係に還元されたのである。柴田支局長時代迄は局員は支局長以下三名であつたが、發行通信內容の豐富化と省行政機構の整備充實とにより支局の業務漸く多忙となつたため支局員も四名に增加され又電々分室員も三名となつた。從つて支局社屋も狹隘となつたため上原支局長代理時代に元中銀分行を借受けて此處に移轉した。其後溝手支局長時代に家主の都合により三度移轉を余儀なくされ再び協和會縣本部の一部を借り受けて狹隘を卿ち乍ら現在に及んでゐる。熱河省はその滿洲國に於ける地理的位置からして何かにつけて幾分遲れ勝ちであつたが、

北支側との特殊的關係から漸く一般の認識を深めるやうになり更に豐富な地下資源の確認は益々熱河省を表面に浮び上らせてゐる。之迄に至る國通支局の果した努力には並々ならぬものがあつた。現支局長は川上鎭男である。

△**吉林支局**　吉林支局は大同二年梅原亨滿次が初代支局長に就任吉林省城財神廟に支局を設け業務を開始し、續いて康德元年諏訪本正男が第二代支局長に就任してより飛躍的發展を遂げた。康德五年十一月溝口五郎は第三代支局長として鋭意通信關係の充實に努め支局も南大路松江ビルに移し名聲の高揚に努め、更に第四代支局長豐島正雄が康德九年三月就任するや吉林新報社の創設に際し信報供給機關として側面より大いに援助し第五代支局長には飯田台輔が康德十年十月着任して今日に至つてゐる。現に四便を發行してゐる。

△**通化支局**　通化省の設置に伴つて康德五年十月二十日、西門裡二號に開設し開設當時は支局長戸井田耕の外二名の從事員であり一日二便四十部を發行してゐたが、康德六年十月二十日現支局長の平山貞之と交替した。支局開設の康德五年は東邊道開發會社が設立された年であるが同時に共產匪揚清宇が南滿より北上して通化省に入り古都輯安を初めて襲擊したのも其の頃でその後も共匪の襲擊事件は頻發し、開發事業は大いに阻害され軍警不斷の討伐にも拘らず省民は戰々兢々として民衆の疲弊は其の極に達し全省暗澹なるものあり、斯かる情勢下に在つて支局員諸士がニュース蒐集に通信の發行に努力した事は特筆に價しよう。

△**海拉爾支局**　海拉爾支局は大同二年五月一日西三道街五六番地に開設され初代支局長は中村秀男で僅か二名の社員を以て通信發行を開始した。康德六年四月中央大街十七番地に事務所を移轉した、當支局の最も華々しい活躍は例のノモンハン事件で此のノモンハン事件は國通十年の歷史中特筆大書さるべきもので海拉爾が前線基地となり當時の支局長故杉原双六以下全支局員が本社を始め全滿支社局は素より遠く蒙疆、同盟より馳付けた數十名の同僚と共に國際宣傳戰に不滅の殊勳を樹

立した事である。ノモンハン事件は停戰協定に依つて一段落したが日ソ關係緊迫せる今日海拉爾の第一線基地としての重要性には何等の變りもなく寧ろ益々增加されるに至つたので新都市計畫地に總工費五萬圓を投じ二階建社屋を新築し康德八年七月移轉を完了し今日に至つてゐる。現在の從事員は越坂部支局長以下四名で一日三便を發行してゐるが發行部數は一般ニュース通信七十部、海拉爾版四十部である。

△**王爺廟支局**　蒙地の重要地點として王爺廟に支局を開設する事は早くより要望されてゐた所であつたが、康德六年七月に至り漸く開設の運びに至り吉川正明が初代支局長として赴任して今日に至つてゐる。每日二便の通信を發行し日滿系に信報を提供する外、蒙文通信を發行して蒙民の啓發に多大な功績を擧げてゐる。

△**四平支局**　四平支局は康德八年七月、初代支局長川上鎭男に依つて四平市大同區北八條通二十九番地に開設せられ每日三便を發行してゐる。第二代支局長內山眞一は康德九年六月着任し今日に至つてゐる。

△**黑河支局**　黑河支局は康德六年八月二十五日、安永治が初代特派員として着任し、黑河省公署と協力し、信報の蒐集とオロチョン族の宣撫工作に活躍したが、康德七年十一月一日新美嶽雄と更迭し、一段と社業の充實をなし、康德九年十月一日支局に昇格し、每日二便の通信を發行してゐる。

△**厚和支局**　厚和支局は康德四年十二月一日開設され、松田悟が初代支局長として大いに活躍し、日文通信三便を發行し一時華文通信をも發行した。康德六年四月一日西村淸俊が第二代支局長に、次で康德七年十一月一日長山一が第三代支局長に就任し第四代支局長茂木學惠は康德九年十月一日就任し今日に及んでゐる。同地は回敎が盛んなため此種信報の取材、報導に盡力してゐる。

△**大同支局**　大同支局は康德五年五月故小澤昌次に依つて大同市蘭池街四十三號に創設された。當時支局は小澤支局長一

人にて主として取材に當つてゐた。同年九年一日通信第一號を發刊し、毎日二便を發行したが越えて康德六年三月一日に支局を帥府街二十號に移し更に七年十二月二十二日には火神廟街六號に移轉した。支局開設以來僅か二年半の間に三度の移轉をなし現在の支局は健實なものである。第二代支局長澁谷春夫は康德四年九月就任して翌年四月本社に轉じ、現支局長鮎川不可止が第三代支局長として其の後を繼ぎ今日に及んでゐる。支局は皇軍の蒙疆地區占據後五原を本據として蠢動を續けてゐた馬占山軍、何柱國軍、傅作義軍を徹底的に潰滅すべく皇軍が活躍せる際には必ず從軍して報導の任に當つた。

△**包頭支局**　包頭支局は康德五年九月二十八日、現包頭市金龍王廟巷六に開設、佐藤武美が初代支局長に就任、屢次に亘る現地軍の肅清工作に從軍し常に多大の績を擧げた。現に二便發行。第二代支局長鈴木五男は康德九年十月一日に就任して今日に及んで居る。

△**山海關支局**　昭和九年五月十日、山海關城内に支局を開設し鮎川不可止が支局長に任命された。當時滿支兩國間には通車、通郵、通電等の懸案あり、國境都市山海關はこれ等の準備交渉地であり且つ英兵の越境、郵便局爆破など事件の斷へ間ない地であつたが、昭和十年六月二十六日を以て閉鎖された。

二　特派員及び通信員

琿春特派員

所在地　朝鮮咸鏡北道慶源郡慶源面本町通一一八
開設年月日　康德五年八月一日
歴代特派員　初代菊川新太郎が開設以來今日に及ぶ

滿洲里特派員

所在地　滿洲里三道街ニキチンホテル内
開設年月日　康德六年十月二十日
歴代特派員　初代戸井田耕、康德九年十月より第二代鈴木力

鷄寧特派員

開設年月日　康德九年十月
歴代特派員　村山正雄

扎蘭屯特派員

所在地　興安西省扎蘭屯壹買街西代用官舍

開設年月日　康德六年十月二十二日

歴代特派員　初代松川準吉、康德九年三月に第二代青木秀夫、同十月より第三代諸谷司馬夫

羅津特派員

所在地　羅津府元町一丁目二一番地

開設年月日　康德六年九月一日

歴代特派員　初代淵野菊市、康德九年三月に小川宏第二代となる

盤谷特派員

滿洲國が泰國との間に公使を交換する事となつたので國通も盤谷に特派員を設置する事となり、岩城正治が初代特派員として康德九年十月派遣された

南京特派員

日滿華三國の共同宣言に基き滿華間に大使を交換する事となり滿洲國は駐華大使館を南京に駐劄せしめて居るので、國通も同地に特派員を派し、中國の事情を國内に紹介し又滿洲國の國情を中國に紹介する等の文化、通信の交流をなさしめる事となつた、初代特派員として吉田秀博が康德九年十月派遣された

開魯通信員

所在地　開魯街中區第七牌二二號

開設年月日　康德五年五月一日

歴代通信員　初代佐々木清臣、七年二月清野良三、九年七月石井一男

同江通信員

所在地　三江省同江縣同江

開設年月日　康德八年二月一日

歴代通信員　初代鹽澤正篤、同年十二月谷口正男が交替

圖們通信員

所在地　延吉縣圖們街銀河區二七ノ一

開設年月日　康德五年十二月一日

歴代通信員　開設以來宇都木四郎の擔當

鞍山通信員

所在地　鞍山市、鞍日印刷社内

開設年月日　康德七年七月一日

歴代通信員　開設以來野尻彌一の擔當

營口通信員

所在地　營口市大和區南本町一ノ一

開設年月日　康德六年十一月一日

歴代通信員　初代飯野元一郎、七年十一月岡守鋭が交替

開原通信員

所在地　開原街開原大街十一

開設年月日　康德六年十一月一日

歴代通信員　開設以來坂宮成の擔當

本溪湖通信員

所在地　本溪湖市桃月町四五

開設年月日　康德七年九月一日

歴代通信員　開設以來石田連治の擔當

王爺廟通信員

所在地　王爺廟康德街

開設年月日　康德六年五月十一日

歴代通信員　開設以來池田昌春の擔當

撫順通信員

所在地　撫順市撫順新報社內

開設年月日　康德六年九月一日

歴代通信員　開設以來柴田寛輔の擔當

阜新通信員

所在地　錦州省阜新街西友路

開設年月日　康德七年九月一日

歴代通信員　開設以來宮口富の擔當

遼陽通信員

所在地　遼陽市、遼鞍每日新聞社內

開設年月日　康德八年七月一日

歴代通信員　開設以來渡邊德重の擔當

永安屯通信員

所在地　東安省密山縣永安屯開拓團內

開設年月日　康德七年七月一日

歴代通信員　開設以來黑須福雄の擔當

龍爪通信員

所在地　東安省林口縣龍爪開拓團內

開設年月日　康德七年七月一日

歴代通信員　開設以來船越繁一の擔當

北學田通信員

所在地　龍江省訥河縣第七次北學田開拓團內

開設年月日　康德七年七月一日

歴代通信員　開設以來中井庸の擔當

千振通信員

所在地　三江省禪川縣千振街富山區

開設年月日　康德七年七月一日

歴代通信員　開設以來太田宗次郎の擔當

青葉通信員

所在地　北安省鐵驪縣東安拜第八次青葉開拓團內

開設年月日　康德七年七月一日

歴代通信員　開設以來森邦衞の擔當

鶴立崗通信員

所在地　三江省鶴立縣鶴立崗協和會縣本部

開設年月日　康德七年十月一日

歴代通信員　開設以來清水傳十郎の擔當

富錦通信員

所在地　三江省富錦縣富錦街鴻彌分區

開設年月日　康德七年十月一日

歴代通信員　初代神林石造、八年十一月小泉映が交替

四、蒙疆支社の概況

支社開設前　康德四年(昭和十二年)七月七日、日支事變勃發するやわが國通報道陣は即日戰時編輯體制を確立し逸早く多數の記者、寫眞技師、無線關係者の從軍班を現地に特派して同盟と協力、水も洩らさぬ報道網を張り有ゆる困難を克服して皇軍奮戰の情況の報道に迅速と萬全を圖つた。蒙疆方面においては關東軍の精鋭が八月中旬熱河省境より疾風枯葉を卷いて一氣察哈爾の大草原を南下して察哈爾作戰開始されるや、直ちに中村敏記者、宮澤貞男無線士よりなる從軍班を特派し、關東軍快速部隊に從軍の兩名は早くも八月二十五日には察哈爾省域張家口に皇軍と共に入城した。九月五日關東軍の第一線部隊による山西作戰開始されるまで、張家口に止り「陣中通信」發行の傍ら關東軍報道班柴野爲亥知少佐指導のもとに事變前察哈爾省政府主席たりし宋培元、劉汝明等の機關紙として發行されてゐた華字紙「察哈爾日報」を收拾して直ちに親日紙察哈爾新報と改題再生せしめ、宣撫新聞として民衆に提供、一時昏迷その極に達してゐた民衆に皇軍の正義を明知せしめて彼等の行動指標を與へ、支那事變にあつて最初に成立を見た親日防共政權たる察南自治政府の順調な生誕（九月四日）に盡力した。これは現在蒙古聯合自治政府の機關紙「蒙疆新報」に發展してゐる。

ついで同年九月十三日大同城陷落により中村記者等の先遣從軍班並に長山記者、坂寫眞班等の四特派員は關東軍の進擊した地帶である察哈爾、山西、綏遠三地區における國通前線報道本部を同地に設置し戰況報道に當つてゐたが綏遠の攻略、ついで十月十七月の包頭の占領を以て一先づ第一期肅正工作の完了を見たため、中村、宮澤兩特派員は太原方面の戰線に轉出した。當時來援中の松田悟特派員は厚和(當時綏遠)に、長山特派員は大同に夫々野戰臨時支局を開設して早くも政治、經濟

文化各般の戰後經營ニュースの取材に活動、斯くて察南自治政府の成立に次ぎ北部山西地區に晉北自治政府、綏遠地區に蒙古聯盟自治政府の誕生を見、蒙疆内の治安工作は進展し諸般の新秩序建設が急速に進むに伴ひ、對内外宣傳通信機關の設置言論報道機關の恒常的存在が漸次各方面より要望せられるに至つた。

支局の開設　本社では國策通信社としての任務を以て此の蒙疆建設の躍進に即應すべく十一月廿三日當時の編輯局長小野敏夫氏が滿洲國政府弘報處理事官岡田益吉氏等と共に蒙疆現地の視察を行ひ當時の張家口特務機關長松井太久郎少將、駐蒙軍大橋熊雄中佐等と協議の結果現地軍當局の要請を容れ厚和に正式支局の開設を決定した。此の時特に厚和に支局開設するに至つた理由は當時の事情は地理的、政治的觀點より蒙古聯盟自治政府の所在地にして蒙疆施政の中心たらしむべく豫定されてゐたので西北の言論報道の一大據點たらしむる必要があつたのであらうと思はれる。小野編輯局長は松田特派員と共に厚和に直行し、綏遠特務機關、綏遠政治接收委員會、蒙古聯盟自治政府等の協力を得て康德四年十二月一日には早くも蒙疆地域内最初の支局たる厚和支局(當時綏遠支局)が正式に開設され同時に滿洲國通信が内外刻々の重要ニュースを盛つて部數約二十部ではあるが蒙疆言論報道文化の洋々たる前途を豫約想せしめて即日發行されるに至つた。蒙疆政權設立匆々で輸送其他の關係により比較的ニュースに惠まれてゐなかつた地域であるだけに俄然その反響は大きく飛行機等を利用して厚和から張家口に大同、包頭等の軍其他關係機關にまで配布される狀態であつた。

一方察南自治政府及び蒙疆聯合委員會の所在地たる張家口においても軍及び蒙疆政權の要望により十二月十七日恒常的支局の開設を見るに至り、北支に特派中の澁谷春夫記者が支局長に就任した。然るにその後蒙疆地域における急速なる治安の明朗化に伴ひ諸般の復興及び新秩序の建設は政治經濟各方面にわたつて一大進展を見、先づ金融幣制の統一、交通の整備、郵政通信の確立、電氣事業の復舊建設、鑛礦の開發等が軌道に乘るに伴ひ必然的に言論文化の統一振興、新聞機構の整備が

急務となり殊に蒙疆三自治政府設立せられ、蒙疆聯合委員會の指導のもとに蒙疆政權は漸次强化確立を見てはゐるものゝ眞に蒙疆の重要性、特質について極言すれば蒙疆の何たるかは未だ殆ど眞實を知られず又理解されてゐない有樣で、蒙疆建設の推進には蒙疆建設の眞の姿を報道し內外輿論の歸一を圖ることが最も緊要であつた。特務機關長松井太久郎少將及び蒙疆聯合委員會最高顧問金井章二博士の如き報道、文化の重要性に明るい人々が當局にあり逸早く弘報制度殊に國策通信社の確立に著目せられた結果、滿洲弘報協會及び滿洲國通信社に對しこれが實現方を依囑されたので森田弘協理事長兼國通社長は昭和十三年（康德五年）二月十六日新京を出發し同盟通信社吉野理事と共に張家口に赴き現地當局と懇談を遂げ張家口、厚和、大同、包頭の地に國通支局を開設して內外通信の募集播傳を行ふと共に蒙疆政權の國策代表通信社としての機能を發揮せしめ併て舊政權より接收した察南の察哈爾日報、綏遠の綏遠日報をも併せて新聞の一元的統制運營を行ふ新聞社の設立を滿洲弘報協會（實質的には國通）が協力擔當する大綱の決定を見るに至つた。

支社昇格　かくて當時の弘報協會（國通）總務部長松本於菟男氏は三月五日新京發にて張家口に赴き、灤谷張家口支局長と共に蒙疆政權との間にこれが具體的細目の打合を遂げ、張家口支局を蒙疆支社に昇格せしめ、大同、包頭にも夫々支局を開設することになり早くも康德五年三月二十五日松本於菟男氏が蒙疆支社長を命ぜられ三月二十八日には西村淸俊、小澤昌次兩記者に齋藤忠良、齋藤文五郎、谷川豐の諸職員を初め本社編輯總務、業務等各部門より蒙疆支社局開設及び蒙疆新聞社創設の要員が續々新京を出發赴任し、此處に蒙疆弘報制度飛躍の一新紀元を劃するに至つた。同四月一日蒙疆支社及び大同支局の創設を見るに至り初代大同支局長には小澤昌次が就任した。

一方前記の新聞社の設立に關しては昭和十三年五月十四日蒙疆聯合委員會令第十號を以て株式會社蒙疆新聞社法制定公布され資本金四十萬圓（蒙疆聯合委員會、蒙古聯盟察南、晋北の各自治政府等分出資）を以て蒙疆特殊法人として蒙疆新聞社

の設立を見た。理事長に松本蒙疆支社長、通信部長澁谷春夫、取材部長西村清俊、總務部長齋藤文五郎、營業局長齋藤忠良廣告部長谷川豐等の國通蒙疆支社同人が兼務就任して蒙疆新聞社の運營に當ることゝなり、六月十日蒙疆における最初の日字新聞たる蒙疆新聞を創刊したのを初め張家口において蒙疆新報、厚和にて蒙疆日報、大同に於て蒙疆晋北報の三華字紙、張家口において蒙古週報（蒙字紙）等の各新聞を發行するほか各種印刷物を出版して八達嶺の彼方蒙疆の天地に一大文化王國を築き、高速度輪轉機をはじめ近代的施設は通信部門の整備と俟つて蒙疆内外の建設を進展せしめた功績は顯著なものがあつた。尚蒙疆支社局は國通支社長たると同時に蒙疆政權唯一の代表國策通信社としての性格と機能を有し之を蒙疆通信總局と稱した。蒙疆支社が蒙疆通信總局に相當し厚和、大同、包頭の支局は夫々蒙疆通信總局の支局に相當し（蒙疆通信總局は現在蒙疆通信社と改稱す）蒙疆支社を中心に緊密な連繫を保持し蒙疆新聞社に對しては内外のニュースを提供し對外的には張家口に强力なる無線發信機を据え新京、北京等を初め日滿華各地と連絡し新京國通本社を通じて全滿に、同盟通信社を通じて日本及び全世界に、北京、上海等を通じて全支那に蒙疆ニュースを提供、蒙疆の建設を通じて東亞新秩序の建設に國策通信の重要使命を果しつゝある。察哈爾作戰直後從軍特派員が戰場における惡條件を克服して野戰支局を開設して陣中通信を發行した當時に比し、五年後の今日は數十人の從事員を擁して支社局間に互に無線通信を以て相呼應し蒙疆建設は勿論大東亞戰下にあつて一絲亂れず報道國策に挺身しつゝある偉觀は全く隔世の感がある。

蒙疆支社概況　昭和十二年十二月十七日開設された張家口支局は前述の經緯にて昭和十三年四月蒙疆支社に昇格し、同年五月蒙疆新聞社法の公布と共に蒙疆通信總局の名稱のもとに蒙疆政權の唯一の代表國策通信社として大同、厚和、包頭の三支局をも統轄して蒙疆政權唯一の對内外宣傳は機關としての活躍を行つてゐるが、現在は支社長安井徹、編輯部長青木啓、連絡部長西田清治の幹部に依つて運營され蒙疆に於ける國策通信としての使命に鑑み事變以來の蒙疆の復興狀況その他を内

外に宣傳報道すると共に蒙疆地域内の唯一の新聞社たる蒙疆新聞社に對しニュースの供給をなし、軍の作戰に際しては五台山、添源、五原、東齊堂その他地區内外の作戰に從軍班(次項參照)を派遣し報道報國に挺身すると共に、各種の企畫により蒙疆内外の弘報宣傳につとめてゐる。初め支局は張家口市橋東街五四號にあつたが、昭和十三年五月に張家口市明德北大街六號に移轉し、更に昭和十五年九月六日現在の興亞大街に移轉した。

輝く蒙疆支社局の戰歷　蒙疆支社局は關東軍の察哈爾作戰に從軍し野戰支局を開設した當時の砲煙の中に發芽してゐるだけに極めて武運に惠まれ大小幾多の作戰には常に多數特派員(記者、無線、寫眞)を從軍せしめて皇軍作戰に協力し常に張家口より包頭まで全蒙疆支社局が一體となり聖戰下報道國策に挺身重責を果して偉功を輝かし渾然たる蒙疆支社局魂は極めて旺盛なものがある。

一　康德六年四月傅作義、何柱國、馬占山等の敗殘兵は綏遠奪回を企圖し、西、南、北より進攻し來れるを皇軍機動の妙を發揮して捕捉殲滅した際、厚和支局が中心に大戰果の報道に活動した。

二　五台山作戰＝康德五年には山西省五台山一圓の共產八路軍討伐に小澤昌次、三木京典等の特派員が後宮、當岡等の各部隊に從軍戰況報道に當ると共に陣中新聞等を發行するなど張家口、大同兩支社局提携して大いに活動した。

三　第一次安北作戰＝蔣介石政權の所謂四月攻勢による蒙疆地區の治安攪亂の企圖にもとづく第七、第八戰區殘兵を主力とする門炳岳麾下安華亭が率ゐる敵を殲滅すべく行動を開始した皇軍〇〇部隊の小林、大井、辻村、藤井、山口、島田、堀内の各部隊は四月十日〇〇を出發、十一日午後六時敵の重要據點安北を占領確保したが右報道に當つて我社は佐藤包頭支局長が基地を受持ち前線班として小川宏(記者　蒙疆支社)茂木學惠(無電蒙疆支社)兩名を派遣し他社の從軍なかりし爲め我社が獨占的報道に當つた(昭和十四年)。

四　涞源作戰＝山西省北部に河北省北部山岳地帶を根據地として蟠居し晉察冀邊區委員會を組織して共產軍政を布く聶榮臻麾下共產軍捕滅の爲の行動を開始せる皇軍に我社は小川宏(記者蒙疆支社)井上榮樹(無電蒙疆支社)平山作一(連絡員臨時雇傭)の三名を從軍せしめた(昭和十四年)。

五　第一次五原作戰＝蒙疆西北オルドス一帶に蟠居する傅作義、馬占山麾下二萬五千の敵兵を殲滅すべく皇軍は昭和十五年一月二十八日行動を開始し蒙疆に於ける最も大いなる作戰をなした。之に對し我社は蒙疆地區全支社局を動員すると共に同盟北支總局より六名

國通本社より二名の應援を仰いで報道の萬全を期し大朝、大毎また各二十數名の記者、無電班を派遣して三社間に猛烈なる報道戰を展開したが、結果は我社の壓倒的勝利に歸した。當時の陣容は厚和が戰鬪本部の當時は三藤支社長厚和に在つて總指揮を採り、西村厚和支局長以下全支局員不眠不休の活動をなし本部の包頭進出と共に報道本部を包頭に進め本部は三藤支社長、佐藤包頭支局長、依岡健二郎記者(同盟北支總局)、無電は茂木學惠(蒙疆支社連絡部長)西村莊一(厚和支局)千原正義(新京本社)を以て編成、前線班は黑田部隊に三木京典(記者大同支局)山田義數(無電厚和支局)前田廣行(連絡員蒙疆支社)を從軍せしめ小島部隊は長山一(記者新京本社)豐田健吉(無電同盟北支總局)相澤義信(映畫班同盟北支總局)平山作一(連絡員臨時雇傭)外同盟北支總局連絡員一名計六名を從軍せしめた。

六　河北省、察南省境東齊堂附近作戰＝右地區の共產軍討伐作戰には我社は鈴木五男(記者蒙疆支社)井上榮樹(無電蒙疆支社)の兩名を從軍せしめ獨占的報導に從軍した(期間昭和十五年二月)。

以上のほか蒙疆支社としては昭和十五年七月事變三周年記念日を期して蒙古政府金井最高顧問、寺崎蒙銀副總裁以下の在張要人を集めて遠東莊倶樂部で「伸びる蒙疆座談會」を、また包頭支局でも同日「第一線座談會」を開催して同盟を通じて日本全國新聞社に供給して大いに蒙疆宣傳に努力した。

七　第二次五原作戰＝一月の第一次五原作戰後皇軍は五原より撤退し五原には桑原機關(特務機關)指導の下に蒙古政府警官隊及び歸順部隊たる王英軍部隊が同地の治安維持に當つてゐたが敵は三月二十日夜突如五原奪回を企圖して夜襲し來り、警察隊並に王英軍も極力奮戰したるも衆寡敵せず桑原中佐は戰死して五原は再び敵の手中に歸する一大不祥事突發したので、皇軍は直ちに行動を開始し二十四日には再び敵を五原より擊退したが右作戰には佐藤包頭支局長が唯一人の從軍記者として獨占的に報道した。

八　朔縣作戰＝晉北南部朔縣附近共產軍討伐作戰には三木京典(記者大同支局)西田清治(無電大同支局)大木清(連絡員蒙疆支社)の三名を從事せしめ報導に當る(昭和十六年)。

九　第二次安北作戰＝昭和十五年仲秋節を期す敵逆襲の情報に依り皇軍機先を制して行動を開始、之に對し我社は包頭を基地に三藤支社長以下茂木連絡部長、佐藤包頭支局長、同支局員辰己利治、先崎喜久治を配置し前線班として三木京典(記者大同支局)秋吉親男(無電包頭支局)前田廣行(連絡員蒙疆支局)の三名を派遣した。